

あっとほーむカレッジ

- ・オープンカレッジ
- ・基礎クラス
- ・応用クラス
- ・ゼミ

あっとほーむのような
ところをつくりたい

子どもにかかわる
仕事がしたい



あっとほーむの価値観を広げる
ことで社会問題を解決する

あっとほーむの活動を続けてきた中で「自分の地域にもあっとほーむのようなところがほしい」という働く女性の意見と、「自分もあっとほーむのようなところを立ち上げたい」という起業希望者からの相談が多くありました。

そこで、あっとほーむに共感し、「自分もあっとほーむのようなところを立ち上げたい」という想いを持つ方に対し、私たちが長年培ってきたスキルやノウハウを伝えることにしました。それが、あっとほーむカレッジです。

あっとほーむカレッジは、起業経験があったり、事業計画や予算を立てられたりする人ではなく、「自信もないし経験もないけれど、あっとほーむのように地域の子どもたちの居場所を作りたい」「自分ができる範囲で地域の親子の支援をしたい」という方を対象として、起業までの支援をするものです。

本カレッジ卒業後、開業してからもつながりをもてるように「おうち保育園®協会」を設立。仲間としてお互いに支えあう関係を作っています。次ページからはおうち保育園®協会の会員を紹介します。

「おうち保育園®」はあっとほーむの登録商標です。

おうち保育園®協会 会員インタビュー

KADOYA
おうち保育園®

岩崎 ひろ美 さん

横浜市中区本牧町



岩崎ひろ美さんは、自宅の洋品店の一部を改装して、おうち保育園®を開業しました。実は起業前、あつとほ一むカレッジの卒業プレゼンで自分の想いを家族に伝え、「応援するよ」と言ってもらったものの、家族を巻き込んでどうなるかな？と不安な面もあったという彼女。「そんな心配はどこ吹く風。実際は家族みんなで送迎や子どもたちの相手をしてくれました。」彼女の真剣さが家族に伝わり、理想としていたカタチになったのです。

起業してからの振り返り、辛いことや悩みごとを長引かせないことが肝心なのではと話す彼女。「日常の愚痴などは夫に聞いてもらい、事業に関することはシヨウコさんへ相談しています。時には、起業した仲間と連絡をとったり、あとは、仕事とは関係ない友人のおしゃべりが気分転換。最近はヨガもはじめて瞑想もします。」と話します。

また岩崎さんは、起業後初めてお預かりしたお子さんとのエピソードを教えてくださいました。「私がほぼ毎日保育園へお迎えに行き、おうち保育園に戻ってくると軽食を食べ、おうちにいるように過ごすという生活でした。その子の保育中に、新しく利用したいという母娘さんが来て挨拶をすると帰って行きました。すると、その子は急にぐずり、泣き顔に。私が何を言っても聞いてくれずに困っていると、店にいた夫が相手をしてくれてご機嫌が戻りました。その出来事をよく思い返し

てみると、挨拶に来た女の子に私が取られたとやきもちを焼いて起こした行動のようでした。」そんな子どもへの想いを知り、ますます可愛く感じたという岩崎さん。働くママや子どもたちも、家族のように可愛がってくれる岩崎さんに安心し、いざという時も頼れることをどんなに心強く感じたことでしょう。

起業して5年が経つ岩崎さん。最後に未来へ向けての想いを教えてくださいました。「起業当時より自分も体力面で衰えを感じることはありませんが、これからも自分軸を大事にしながら自分にできることを取り残さぬように、時には自分だけでは見えない所は、他の人のアドバイスを取り入れながら事業を続けていきたい。そして、世の中の子育てをしているご家族が少しでも、子育てを楽しんでいると感じたい。」今後も彼女の活躍で、笑顔で暮らせる親子が増えそうです。



「これからも自分軸を大事にしながら自分にできることをやっていきたい」



お迎え付き夜間保育施設 にじのことり

三井 恵 さん

横浜市青葉区藤が丘

あっとほ一むカレッジを卒業し、子育て支援での起業を果たし、地域の親子をサポートしている4名の特別インタビュー!起業後の思い出深いエピソードや、5年10年先の未来について語っていただきました。

三井恵さんは、起業して4年目を迎えました。起業してからを振り返り、夜間保育の時、子どもたちと食事をし、一緒に遊んだりすることもあったというお母様について語ってくれました。「今年初め、母が亡くなった時のことが一番心に残っています。母は、子どもたちからも「ひでこさん」と呼ばれて人気者。昨年は体調が優れず、別室にいたことが多くなりましたが、子どもたちは大丈夫?と声をかけたり、心配だよと家族に話してくれました。」三井さんは子どもたちが自然に思いやりの心、いたわりの心を身に着けていることを感じました。

「母が亡くなったことを保護者様にお伝えすると、みなさんが丁寧に子どもたちに話をして下さり、子どもたちがお別れをしたいと会いに来てくれました。特に母を心の友と呼んでいた男の子は、葬儀にも参列し、棺を運んでくれました。」三井さんはお母様が最期に、子どもたちへの授業をしてくれたのかなと思ったそうです。「母は、にじのことりにとって大切なスタッフの一人だったんだなと思いました。」

いつもにじのこつりのたのしい様子をSNS等で発信している三井さん。「応援してくれたり、ブログを読んだ人たちが優しい、明るい気持ちになれたら、小さな幸せを分け合っているような気がして嬉しい。」と話します。自分で事業をしていると、一人で考えて煮詰まっ



まい、不安だけが大きくなりがちだそうです。そんな時は小栗さんに相談したり、あっとほ一むカレッジのセミナーに参加します。また、起業した仲間と話すと、前向きになるそうです。

最近では、地域とのつながりが増え、そこで出会う方々から学ぶことや縁も増えました。「子どもに関することや地域振興も学び、将来NPO法人として活動していきたい。また、活動を通して、ママや子どもたちに食の大切さも伝えて行けたら。」と話します。「事業パートナーのふみさんと共に、小さい子どもから高齢者まで地域みんなが生き生きと自分らしく生きていくために、みんなが気軽に集えて笑顔になる居場所を作っていきたい。」と力強く未来について語ります。周囲を明るく照らす彼女の活動を、きつとお母様も笑顔で応援してくれていることでしょう。

「地域みんなが生き生きと自分らしく生きていくために」

おうち保育園®協会 会員インタビュー

はっぴいママ

堀澤 裕美 さん

熊本県荒尾市



堀澤裕美さんは、あつとほーむカレッジを卒業し、働くママをはっぴいに目指して開業。今年で4年目に入りました。開業以前は、認可保育所や病院に勤務する医師や看護師が子どもを預ける院内保育所で3年以上保育士として働いてきた子育て支援のプロ。保育の現場で働くママたちの困っている姿を見てきた彼女は、なんとかしたいと立ち上がり、働くママたちがいざという時も安心して子どもを預けられるように、そして、子どもたちがおうちのような場所で安心して過ごせるようにと、自宅で夜間や休日、病児の保育を担っています。

「実際に開業してみると、困っているのは働くママだけではなく、どこに相談しても対応してもらえなくて悩んでいるママたちに出会いました。困っているママをはっぴいにを事業理念として、ママたちの想いや状況を聴き、自分ができることとできないことの見極めをしながら活動しています。」と語る彼女。「自宅での小さな子育て支援事業ですが、色々な状況のお子さんをお預かりするため、常に最新の情報や知識が必要で、県や県保育協会主催の研修に参加しています。」と話します。

また堀澤さんは、「保育士として勤務していた時の同僚やその時の保護者とのつながりで、困っているママたちと出会うことができ、事業を始めた時の思いが届いた気がして嬉しかった。」と、起業

後の思い出を話してくれました。「自宅で事業をするということで、家族にも配慮してきました。」と言います。あつとほーむカレッジの卒業式で家族の前で事業プレゼンを行い、自分の想いを伝えることができたことで、家族も活動を手伝ってくれているそうです。多くの困っているママたちを見てきた彼女は、少人数で子どもたちを丁寧に保育できるおうち保育園のような場所がもつと増えたらいいなと感じます。「自身の年齢を考え、体調管理をしながら、今後も支援が必要な方々へ向けてはっぴいママの活動に取り組みたい。」という堀澤さん。辛い時や悩んだ時も支えてくれた事業パートナー、かよちゃんとともに、地域の困っているママたちの心強い味方となってくれることでしょう。



「事業を始めた時の思いが届いた気がして 嬉しかった」



NPO法人 アフタースクール にじのいえ

宮尾 智美 さん

大阪府高槻市

あっとほ一むカレッジを卒業し、子育て支援での起業を果たし、地域の親子をサポートしている4名の特別インタビュー! 起業後の思い出深いエピソードや、5年10年先の未来について語っていただきました。

にじのいえを開業して4年目になる宮尾智美さんは、これまでを振り返り、子どもたちの成長を間近で感じ、「日々愛情を持って関わってきてよかった。そして、起業してよかった。」と感じるそうです。「自分のやりたいことを、自分のペースで仕事にでき、家族の時間も大切にできる。そして、働くママ・パパ、子どもたちのお役に立てていることが何より幸せ。」と話します。

また、「家族が一番のサポーター」と言う彼女。「家族は起業前も応援してくれていましたが、私の活動への理解も年々深まり、主人が今では一番の理解者です。二人の娘は大きくなったらにじのいえのスタッフになりたいと言ってくれています。」と話してくれました。

順風満帆に見える宮尾さんですが、事業のことで悩んだり、辛いと感じることもありました。「そんな時はまずは自分でしっかりと考え、答えを導きだします。自分で事業を行うというのは、選択と決断することの連続ですが、それでも、どうしても前に進めず、背中を押してほしい時があります。そんな時はいつもあっとほ一むの小栗さんに相談しています。」と話します。

「自分一人では決して事業は行うことができません。たくさんの方が自分のことを支え、応援し、助けてくれるからこそ安定して続けられる。事業が大きくなっていったとしても、すべての人、事柄

に感謝の気持ちを忘れずにいたい。」と話す宮尾さん。

これからの活動を考え、「にじのいえを卒業した子どもたちがいつでも帰って来られる場所になりたい。にじのいえの活動が働くママの安心とゆとりにつながるよう、その時その時のニーズをキャッチしながら活動していきたい。」と語ります。彼女は、子どもたちの個性の違いや本来持っているものを認め、子どもたちの成長に伴って適切な関りができるようにと学ぶことも忘れません。

本気で子どもたちの教育や保育について真剣に考え、子どもの声に耳を傾けられる大人が増えること、そして、安心して子どもを預けることができる場が増え、子育て中の働く女性がより生きやすい社会になることを願いながら、行政や小学校、地域と連携し、これからは宮尾さんの活動は力強く進んでいきます。



「すべての人、事柄に感謝の気持ちを忘れずにいたい」